

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	王 怡然
論文題目	清末期蚕業留日学生と中国近代蚕糸業——蚕業から蚕学へ		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、清末期に蚕業を学ぶために来日した留学生の活動を通して中国近代蚕学史の源流の一つを明らかにしている。各章において特に清末から辛亥革命までの時期の留日学生に焦点をあて、その来日時期、人数、出身省、留学先、留学中の活動、さらに帰国後の貢献、といった基本的な問題について具体的に考察する。</p> <p>第一章は、清末期蚕業留日学生の人数に関する調査と考察である。この調査の結果、最も多くの留学生を出していたのが、四川省であったことが明らかになった。最初の留学生は1897年、杭州蚕学館より埼玉県蕨の競進社へ派遣された嵯侃と汪有齡であり、1905年東京蚕業講習所本科を卒業した潘英が女子留学生の第一号であったことなどを突き止めている。</p> <p>第二章と第三章は、留学生を受け入れた日本側の蚕業教育を専門とする学校に対する考察である。官立私立の学校があったこと、その受け入れ態勢、教育方針について解明した。また帰国後の進路についても調査を行い、官立学校の卒業生は、その多くが官僚となったのに対し、留学生の大多数が入学した私立学校の卒業生は、全員が実業界において活動したことを明らかにしている。</p> <p>第四章では、中国蚕糸業会について検討した。東京で創設された蚕業組織—中国蚕糸業会の中心となったのが留学生の杜用選と官僚の黄遵楷であったこと、学官産連携の要素をもつ組織であったことを解明した。またこの会には蚕業振興を通して中国を危機から救おうという認識があったことも明らかにしている。</p> <p>第五章では、留生たちの帰国後の活動の一つとして、1913年北京で成立した中華民国蚕糸会を取り上げた。本会は上記中国蚕糸業会の事業を受け継いで創立されたが、創立大会以降、具体的な活動記録が発見できず、当時の政治状況から考えると、会として具体的な活動を行うには至らなかったのではないかと論じている。</p> <p>第六章は、『農桑学雑誌』を中心に考察する。本誌の刊行に関わった留学生の所属先及び杜用選が費用の大半を出していたことを明らかにした。第一号の発行時期から考えると、羅振玉らの『農学报』に次ぐ、早期に発行された農業・蚕業専門誌であった。更に当時の農業・蚕業留学生の動静を知ることができる重要な史料であることを指摘している。</p> <p>第七章は、中国蚕糸業会の機関誌『中国蚕糸業会報』を取り上げる。本誌は『農桑学雑誌』と密接な関係を持ちながら、1909年8月に東京で創刊、1911年旧暦6月の第9期まで発行された蚕業専門誌であった。本誌は中国国内で大変歓迎され、第1期と第2期は申請者の計算によれば数千冊が発行され、一部の文章は『湖北農会報』や『山西実業報』に転載された。この事実は、留生たちの蚕業改良における貢献を具体的に証明するものであると指摘した。</p>			

第八章では、蚕業留學生の著書訳書について考察する。留學生らは1907年から1910年にかけて『対清蚕業策』（渡辺繁三著）など6冊の本を翻訳し、『製糸新論』（張青選著）など8冊の本を出版した。この活動もまた留學生たちの近代蚕業に対する貢献として位置付けるべきであると評価する。

第九章では、産業界だけでなく為政者に対しても留學生たちが改革を提言していたことを明らかにする。彼らは1908年6月から1911年1月までの2年半の間に農工商部、四川総督、広東省勸業道などに宛てて9通の上書を送っていた。特に四川総督に宛てたものが多く、それは強力かつ実効性のある勸桑政策が総督によって推進されていたことに呼応したものであったことを明らかにした。

第十章では、杜用選の組合論について考察する。杜の経歴から、彼が組合論を構想するに至る経緯を分析した。また彼が中国農村の不平等の是正を意図し、「蚕糸業組合」を「救国の第一策」とまで考えていたことを示した。

以上のように、清末期の蚕業留日學生の留学目的、活動の様相、中国蚕糸業に対する貢献について考察を行い、留日學生たちが蚕業技術の普及から蚕業制度の導入へ、蚕業の改善から農村の制度の改善へと認識を深め、それらを体系的に中国で実践しようとしていたと結論付けた。

なお、本論文の背景を成すものとして補論2篇を付す。補論1は中国最初の蚕学研究団体小考であり、2は峰村喜蔵とその清国蚕糸業研究である。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、清朝末期から辛亥革命までの期間、蚕業を学ぶために日本に留学した学生と、その帰国後の活動について考察したものである。

「序論」では、彼らが中国の伝統産業であった蚕業が衰退しつつあることに危機感をもち、近代化した日本のそれを学ぶことによって中国を豊かにしようとする意欲があったことを紹介する。

第一章「清末期の蚕業留日学生」では蚕業を学ぶという目的をもった清国留學生の人数を調査し、考察の対象となる集団を明確にする。申請者は中国の資料を博搜し、蚕業を学ぶことを目的とした留學生の人数とその出身地域を整理し、従来考えられていた江南地域ではなく、四川出身者が最も多いことを発見している。

第二章「官立蚕業学校への留學生」、第三章「私立蚕業学校への留學生」では、日本で彼らを受け入れることとなった学校について調査した。日本において蚕業振興のために作られた官立学校・私立学校の設置と運営、それぞれの中国人留學生受け入れ態勢、さらには募集の方法について、当時の新聞広告に至るまで資料を収集整理し紹介している。設置期間の短かった私立学校などについては、本論文によってはじめて明らかになった事実がある。

第四章「近代中国初の蚕糸業学会—中国蚕糸業会」から第八章「蚕業留學生の著書」では日本留学中の学生達の活動を中国蚕糸業会創設など組織化の動きと『農桑学雑誌』をはじめとする雑誌、著訳書の発行といった知識の発信の二方面から述べる。学会の規約や雑誌執筆者、発行部数などについて、資料に基づき分析を加え、これらの活動が中国の現状に対する危機感から行われたこと、中国国内にも一定の影響を与えたことなど、その意義について証明した。

第九章「留學生たちの上書」では、上章で述べた諸活動には、中国の現状を改革しようとする目的があったということをもより明確にした。申請者はこの章で、留學生達の帰国後の様々な活動を紹介するとともに、為政者に対する、蚕業の改革と振興のための上書について取り上げている。上書の多くが四川総督に向けて提出されたたていた事実を発見し、それを四川総督の政策と関連させて論じた観点に新しさがある。

第十章「杜用選と組合論」は、本論文においてしばしば言及される杜用選について論じている。申請者は杜用選を、蚕業を学ぶことを目的とした留日学生たちのリーダー的存在であり、中国の蚕業の近代化と振興に生涯を捧げた人物として捉えている。彼の様々な取り組みのなかから、日本の組合制度を模範とし中国の蚕糸に関わる農家、業者を組織化しよう試みた「組合論」を選び分析した。その結果、留日蚕業学生が日中それぞれの蚕業に対してどのような認識をもっていたか、また蚕業によって中国社会の活性化を目ざすという彼らの目的を浮かび上がらせることに成功した。

最後の「結論」において、清朝末期に日本の蚕業を学ぶために留学した人々の知識修得と中国国内における活動を総括している。

以上のように本論文は、蚕業に焦点をしばり、清朝末期の中国近代化における留日学生の動きを考察したものである。先行研究を咀嚼し、その上でより深く日本の蚕業との関わりについて追究している。従来注目されてこなかった資料、また存在が明らかではなかった資料の発掘に努めており、今後中国近代の蚕業研究において参照されるべき論文であることは間違いない。本論文の最も重要な意義はこのような新資料の発掘と整理にあると言える。このことは申請者が研究者として基礎となる調査能力を十分に身につけていることを示してい

る。

本論文は上記のような意義をもつ一方で、その内容についての分析と考察については更に深く踏み込むことが望まれる点がある。また論文題目では「蚕業留日学生と中国近代蚕糸業」となっているものの、前者についての言及が論文の多くを占めており、後者の考察が十分でないことが惜しまれる。ただそれらの課題は、本論文の価値を下げるものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年8月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降